

温暖化に伴いチャの栽培管理をどう変える？

ー 生産者の要望に基づく検証 ー

茶業技術研究担当 ○工藤 健、吉田真紀、高橋 淳

1 ねらい

温暖化に伴う変化が茶の生育や栽培管理に及ぼす影響を多角的に検証し、生産現場での課題解決と最適な技術導入の可能性を探ることを目的とした。今年度は①秋整枝の時期、②防霜対策、③施肥方法、④オヒシバ防除に関して単年度の結果を報告する。

2 研究内容

(1) 秋整枝の時期が一番茶の生育に及ぼす影響

10月10、20日、11月10日に秋整枝を実施する区（春整枝はしない）を設け、隣接する対照茶園（秋整枝10月25日、春整枝3月25日）と生育を比較した。なお、防霜ファンのスイッチは全区とも3月25日にONにした。

春整枝をしない区では約2割の芽が枯死した。また、当該区の一歩茶芽は対照茶園と比較して、生育が早く停止し、芽長も短かった。

(2) 防霜ファンの稼働開始日が一番茶の生育に及ぼす影響

3月10日に春整枝した20aの茶園を4分割し、ファンの稼働日を①3月10日（萌芽率0%）、②3月23日（萌芽率0%）、③4月15日（萌芽率約30%）とする区に加えて、④ファンの稼働なし区を設けて調査した。

ファンの早期稼働は生育促進に寄与しなかった。一方、収量は稼働開始が早いほど多くなる傾向であった。

(3) 異なる銘柄の芽出し肥が一番茶の生育に及ぼす影響

春肥の窒素量を18kg投入した対照区に対し、芽出し肥投入区では春肥をその半量（9kg）、芽出し肥で9kgを投入した。芽出し肥の銘柄は千代田化成と硫安である。

芽出し肥投入区の収量は対照区と比較して多い傾向であり、特に硫安の収量は対照区比1.3倍であった。一方、成分分析による品質評価では千代田化成が硫安よりも優れる傾向であった。

(4) オヒシバに対する除草法の検討

除草剤として①ラウンドアップ、②ザクサ、③バスタ、試験として④酢酸、対照区として⑤水を、オヒシバの草丈が1cm、5cm、10cmの各段階で散布する試験を実施した。

生育段階によらず殺草効果はバスタが比較的高く、ラウンドアップは認められなかった。また、草丈10cmでは酢酸の効果が高かった。

3 解明点および留意点

春整枝の省略は推奨できず、防霜ファンの早期稼働は収量に影響する可能性があり、施肥・除草剤の銘柄選択が重要であることが示唆された。ただし、本結果は単年度のため、今後さらなる検証が必要である。

(1) 秋整枝

冬期のファン稼働なし

秋整枝 春整枝

①10/10 ×

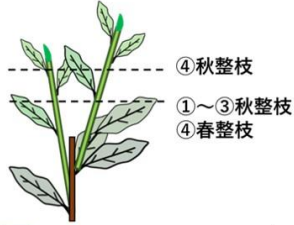
②10/20 ×

③11/10 ×

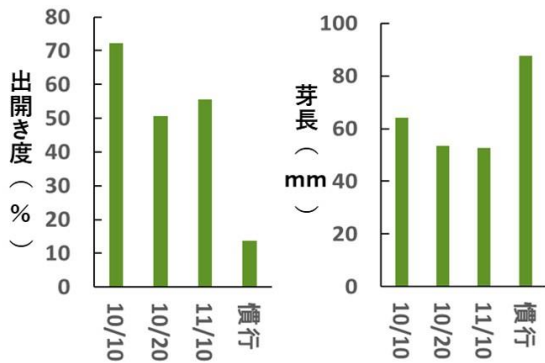
慣行区

④10/25 3/25

①～③は
春整枝の位置で
秋整枝(春整枝なし)

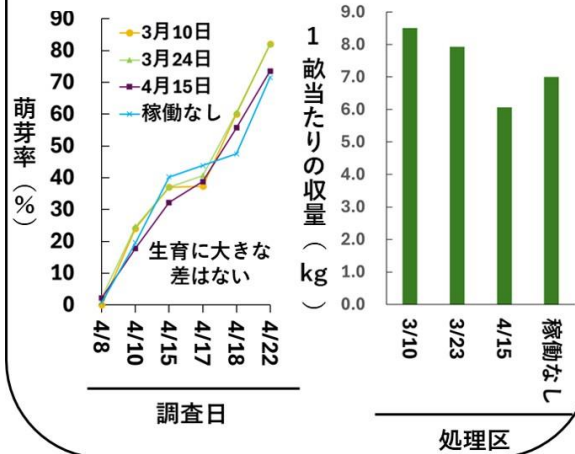
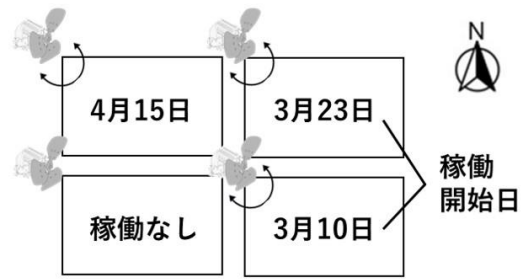


摘採時(5/9)の調査

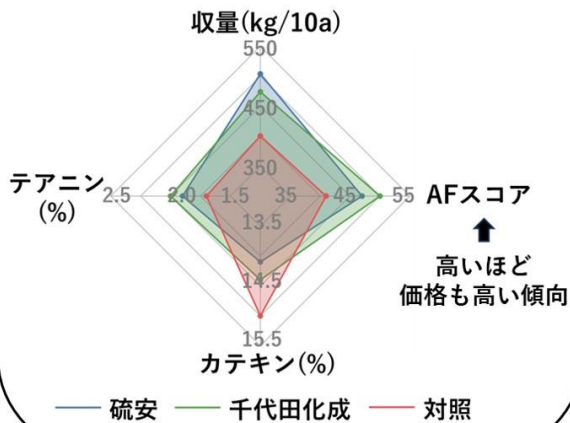
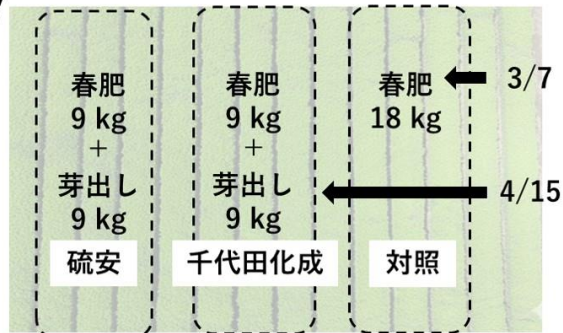


慣行区が最も
出開きにくく、芽の伸びもよい

(2) 防霜ファン

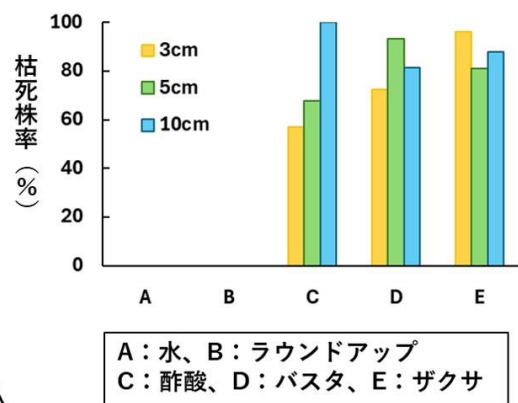
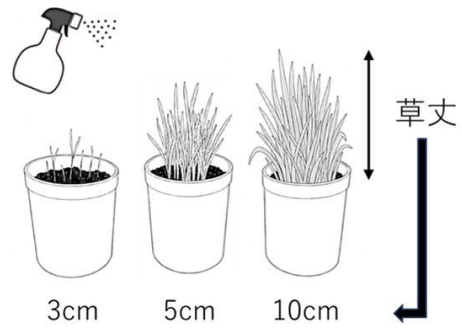


(3) 芽出し肥



高いほど
価格も高い傾向

(4) オヒシバの殺草



A: 水、B: ラウンドアップ
C: 酢酸、D: バスタ、E: ザクサ